



Data	2024-87
監督・脚本	パオ・チョニン・ドルジ
出演	タンディン・ワンチュク/ケルサン・チョジェ/デキ・ラモ/ベマ・ザンモ・シェルパ/タンディン・ソナム/ハリー・アインホーン/チョイン・ジャツォ/タンディン・ブブ/ウゲン・ドルジ/ユベール・レンドウupp・セルデン

👁️👁️ みどころ

イスラエルやシリアは昔から中東の紛争地だが、中国とインドの国境にある、九州の約90%の面積、人口約77万人のブータンもかなりヤバイ地域！？そんな王国の存在を私たち日本人がはじめて知ったのは、パオ・チョニン・ドルジ監督の『ブータン 山の教室』（19年）だが、ここに彼女の第2弾作品が登場！

日本では、明治維新による新政府の成立から民主的な選挙までかなりの時間を要したが、ブータンでは2006年、国民に愛された国王が自ら退位し、選挙による民主化へと転換したようだ。しかし、そんなことがスナリと進むの？

そんなシリアスなテーマ（？）が、『お坊さまと鉄砲』という奇妙なタイトルの“寓話”として登場！これは新鮮！これは面白い！しかし、織田信長ならぬラマの高僧が、なぜ急に鉄砲を必要としたの？ラストにみる、そのタネ明かしの姿に思わずニンマリ！？人間の幸せはこうでなくちゃ！

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * ——

■□■ブータン王国とブータン映画に注目！■□■

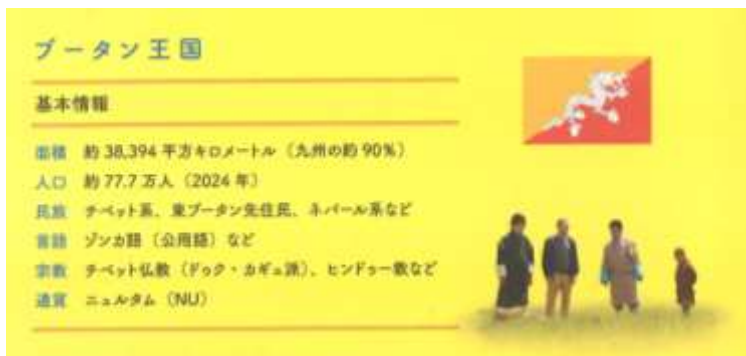
2025年1/20からのトランプ第2期政権の始動を控えた2024年12月の今、ウクライナ戦争と中東紛争の行方はトランプ氏の動向にかかっている。第3次世界大戦の現実的なリスクを含めて、世界情勢は1950年代の「東西冷戦の危機」をはるかに超えた緊迫感を含んでいる。

そんな中、中国とインドの国境にある、面積は九州の約90%、人口約77万人の小国ブータン王国は？それまで世界の誰も知らなかった（？）ブータン王国の名前を一躍有名にしたのは、パオ・チョニン・ドルジ監督の『ブータン 山の教室』（19年）（『シネマ49』313頁）が世界中でサプライズヒットしたためだ。私は、チャン・イーモウ監督の初期の

作品『あの子を探して』(99年) (『シネマ 5』188頁) に感動したが、この『ブータン 山の教室』は、それに匹敵する素晴らしい出来だった。「黒板なし、ノートなし」の「山の教室」での授業風景や、授業の合間に主人公のギター伴奏で歌うルナナ村での“ドレミの歌”は、『あの子を探して』以上の感動を私に与えてくれた。

■□■ブータン王国とは？第1作と第2作の舞台は？■□■

パンフレットによれば、ブータン王国の基本情報は次の通りだ。



また、ブータン王国の首都ティンプーと、第1作の舞台になったルナナ、そして第2作の舞台になったラウの位置は下図の通りだ。



さらにパンフにある「ブータンを知るためのキーワード～『お坊さまと鉄砲』編～」を転載すれば次の通りだ。



◎ ルンタ(タルチョ)とダルシン

経文が書かれた祈りの旗で、版木を使い経文や宝珠を背負った馬(ルンタ)の絵などを印刷をしたもの。ルンタは1本の紐に旗が連なり、橋や建物、木々に結んで掲げる。ダルシンは経文旗を高さ5メートルにもなる木の竿に垂直に掲げたもので、故人の供養として丘に立てる風習がある。風によって仏教の教えが広まるように峠や丘など風通しの良いところに掲げられる。旗は五色だったり、それぞれ単色を使うことも。色は仏教における五色「天・風・火・水・地(青・白・赤・緑・黄)」を表す。



◎ ポー(ボ・チェン)

魔除けとして男根(ポー/ボ・チェン)のモチーフを壁に描いたり、木彫りを軒先に飾っている。小さな木彫りをネックレスとして身につけることもある。



◎ マニ車

円筒の中に経典が入っていて、時計回りに1回転させると経典を読んだことと同じ功德が得られるとされる。大小さまざまな寺院にある巨大なもの。水車を使ったマニ・チュコルや風力や太陽熱を使ったもの、仏具として手にもって回すものもある。



◎ コルラ

仏塔や寺院、聖なる場所などの信仰の対象を時計回りに巡礼すること。



◎ チョルテン

仏塔、ストーパーのこと。僧院内や道路沿い、峠や畑の周辺など、ブータン国内の多くの場所に建てられており、チョルテンの周りをコルラしてお参りする。大小さまざまな形も複数あるが、仏塔は仏様の心を表すとされており、建立時にその内部や基壇の地下部分に仏様への供物を納める習慣がある。



◎ ブータンの蕎麦

映画のラストに登場する美しいピンクの花畑は、蕎麦の花。標高が高いウラは、稲作ではなく蕎麦やジャガイモの栽培が盛ん。伝統的な蕎麦料理には、麺料理の「プタ」、蕎麦粉のパンケーキ「クレ」、蕎麦粉の皮で作る餃子「ヒュンテ」、蕎麦がきの「ディンゴ」等がある。

■物騒なタイトルに注目！本作の問題提起は？■

本作冒頭、本作の舞台となる、周囲を山に囲まれたウラの村に翻るルンタ（タルチョ）とダルシン（経文が書かれた祈りの旗）の姿が映し出され、また本作全編のテーマとなるチョルテン（仏塔）の姿が映し出される。そして、その直後に、2006 年、国民に愛された国王の退位により民主化へと転換を図ることになったブータンで、選挙の実施を目指して模擬選挙を行うことになったことが示される。

そんな中、高僧のラマ僧と弟子のタシとの間で、「タシ、銃が必要だ。手に入れてくれるか？」「どうしてラマは銃を求めに？」と会話するシーンから本格的ストーリーが始まっていく。しかし、高僧は一体なぜそんな指示をタシに？

日本に種子島という名の鉄砲が伝えられたのは 1543 年。また、いち早くそれを戦いの現場に実用化したのは天才・織田信長だ。他方、自由を何よりも大切にするアメリカでは、銃を持つ自由は表現の自由と同じ基本的人権として憲法で保障されている。しかし日本では、1588 年の豊臣秀吉による「刀狩り」以降庶民が刀を持つことが禁じられ、近代法においても「銃砲刀剣類所持等取締法」によって国民が銃を持つことは禁じられている。したがって、仏教国で、日本以上に平和を愛する国ブータンで、国民が鉄砲を持つ必要はないはずだが、そんなブータン国のラマの高僧がなぜ「次の満月までに銃を 2 丁手に入れてほしい」とタシに指示したの？その意図は全くわからないが、そこでラマが、「物事を正さなければならぬ」と話していたが、その意味は一体ナニ？

■選挙は民主主義の基本！だから選挙は善！？■

本作鑑賞直前の 12 月 7 日には、ハマス vs イスラエル紛争の延長として（？）、シリアのアサド政権の崩壊と首都ダマスカスの解放が伝えられた。これによってシリアでは一気に民主化が進み、公正で民主的な代表者選びのための選挙が行われるの？イヤハヤ、世の中はそれほど甘くはないが、親子 2 代続いて圧政が続いてきたシリアに、大きな光明が見えてきたことは間違いない。それと対比すれば、ブータンでは国王が自ら退位し民主化に転換すると宣言したのだからすごい。

誰よりもそのことの意義を知る選挙委員のツェリン（ペマ・ザンモ・シェルパ）は、模擬選挙を成功させるべく派遣されたウラ村で大奮闘！2020 年 11 月の米国大統領選挙で、米国民は完全に赤組（共和党）VS 青組（民主党）に二分されたが、ブータン国のウラ村でも青、赤、黄の 3 党に分かれた模擬選挙を巡って、村民の対立が生まれていた。そしてツナ村に住む主婦ツォモの家族でも、何色を支持するかをめぐる夫と母親との対立が生まれ、それが息子のユペルにも及んでいたから、この家族は、選挙のために、夫婦仲だけでなく、あわや家族全体が崩壊の危機に！ツェリンは、「各国では命がけで選挙権を勝ち取ってきた！」と強調していたが、選挙のために夫婦仲や家族全体の崩壊の危機が迫るツォモにとっては、選挙は善ではなく、ひょっとして悪！？

■□■寓話のような、鉄砲入手の物語に注目！■□■

ハリウッドでも中国でも香港でも、そして日本でも韓国でも、ヤクザ映画に銃は付きものだが、平和な仏教国ブータン国内には、きっと一丁の銃も存在しないはずだ。したがって、そもそも高僧の「タシ、銃が必要だ。手に入れてくれるか？」の指示実現は難しそうだが、それでは映画にならないため、本作に登場してくるのが、銃コレクターのロン（ハリー・アインホーン）と通訳を務めるベンジ（タンディン・ソナム）、そして、タシの3人が展開する、寓話のような物語だ。

種子島の威力を堺の商人から伝え聞いた織田信長がいち早くその大量購入を決定したのは彼の武将としての天才性の一端を示すものだが、ブータン王国のラマの高僧が、いきなり「鉄砲が必要だ」と言っても、容易にそれが実現できるはずはない。それが現実だが、パオ・チョニン・ドルジ監督は本作に上記の3人の物語を登場させ、最初は南北戦争時代の貴重なライフフル銃をめぐる物語を、それに続いては何と世界最強の銃AK-47を2丁も入手する物語を寓話タッチで描いていくからそれに注目。「満月の日まであと4日」というところから始まったタシの鉄砲探しは、満月の日に村の人々が集まる投票所で、無事AK-47を2丁も入手する形で実を結ぼうとしていたが、そこで明かされるのが、なぜ高僧が銃を手に入れてくれと指示したのかという事情だ。さあ、皆さんはそれをどう想像？

本作のパンフレットには、パオ・チョニン・ドルジ監督の「Director」と平山雄大氏の「キーワードから紐解く『お坊さまと鉄砲』の社会背景」と題する「Keywords」があるから、これは必読。さらに暉峻創三氏の「ノスタルジーを離れ、激変するブータン社会をリアルに映し出す」と題する「Review」、御手洗瑞子氏の「朴訥としていて、聡明」と題する「Essay」、本林靖久氏の「ブータン仏教における『不利な交換』と『利他の精神』」と題する「Column」があるので、それもじっくり読んでもらいたい。

それらを読めば、多くの点で、私たち日本人がこれが「日本の常識」と考えているものが、必ずしも「ブータンの常識」ではないことに気づくはずだ。ちなみに、本作のテーマとした2006年の赤、青、黄の3党に分かれた模擬選挙では、圧倒的に（90%以上）黄が勝利したそうだが、それは一体なぜ？国民と世論を真つ二つに分断してしまったアメリカの大統領選挙の問題点が全世界で真剣に議論され、また、日本の東京都知事選挙や兵庫県知事選挙では、オールドメディア VS 新興のSNSメディアの問題点が顕著になっている昨今、ブータン国では本作のようなどかな選挙風景（？）が繰り返されたうえ、本作ラストの何とも感動的なクライマックスを迎えていることをしっかり考えたい。また、模擬選挙で黄の党が圧勝した理由とその意義も、あわせてしっかり考えたい。

2024（令和6）年12月23日記